

【原著】

## 漢字学習における字体認識のあり方とその影響とについて

——小学校第六学年配当漢字「就」を中心として——

橋 村 勝 明

A study of Form Recognition in Kanji Learning and its Influence

——With Special Reference to "就" Allotted to Sixth Graders——

Katsuaki Hashimura

### 一、はじめに

学生が書いた答案やレポートなどをみると、「就」字の傍の字面に二種類存在することに気付く。その違いは左図のように傍の三画目を真っ直ぐに下ろすか①、或いは一旦横画を出してから下に下ろすか②、というものである。この違いを単に個人的な書き癖のレベルの問題であるとする、個別の字形に関わる事象として処理されるべき事柄であるが、書かれた文字をみると特に意識をして右に出していることが窺える。もし意識してということであれば、字体認識にも関わってくるであろう。そこで、本稿では「就」字についての表記実態を調査すると共に、類似の画を持つ漢字の表記実態について併せて調査し、その背景について考察したい。

① 就  
② 就

まず、「就」字の字体について、『康熙字典』で確認をすると、右図①の字体が掲出されており、②の字体は確認することが出来ない。従って、字体としては①の字体が書かれるべきものであることが分かる。但し、「就」を偏と旁に解字した場合、『康熙字典』によると問題の傍には異体字があることがわかる。<sup>②</sup>

尤 正字通尤本字說文尤  
在乙異也从乙又聲

尤 古文

そして、傍の三画目が一旦横に延びる②型の「尢」字は『康熙字典』にも認められるが、①型の「尢」とは別字として掲出されている。

尢

廣韻集韻尢烏光切韻汪說文跛曲脛也本作尢从大象  
偏曲之形徐曰大一足跛曲或作尢今文作尢 又玉篇

尢也短小也  
正字通瘠病

さらに、②型の「尢」に「丶」の付された漢字は、『康熙字典』では掲出されていないので、解字の観点からも「就」字の旁第三画が右に出る字画を字体として認めることは出来ない。

日常生活において、字形のレベルで②型の「尢」に点を付した字画を書くことについては、別字と混同することが恐らくないので、一応のところ問題は無いが、それは個人的な字形のレベルにおいて許容される。

二、「就」字の各教育段階における実態調査

「就」字の表記実態についてアンケート調査を実施するに際し、問題の「就」字だけではなく、類似の字画を持つ漢字についても併せて調査を実施することとした。類似の字画を持つ漢字のうち、常用漢字表にあるものについては、左の漢字が考えられる。

沈 枕  
既 概

右に掲げた漢字の内、「沈」「既」「概」に「就」を併せた四字について、高校生二二二名、大学生二五六名について調査を行った。調査は、仮名によって示した語の書き取りに依った。それぞれの漢字の問題となる画が真つ直ぐに下ろされている字画「し」を持つ字体を正体とし、右の横画の後下に下ろされる字画「し」を持つ字体を異体とした。次に掲げる表は、誤字によって回答をした数を除いた正体異体の数及びその割合である。各項目上段は回答数を、下段は各漢字の正体異体を全体としたときの割合を示す。

【表一】高校生

計	異体	正体	
173 100	93 53.8	80 46.2	就
183 100	78 42.6	105 57.4	沈
37 100	12 32.4	25 67.6	既
43 100	10 23.3	33 76.7	概

【表二】大学生

計	異体	正体	
247 100	138 55.9	109 44.1	就
249 100	129 51.8	120 48.2	沈
149 100	43 28.9	106 71.1	既
251 100	87 34.7	164 65.3	概

右の表より、高校生大学生共に「就」の異体については半数以上が異体字を使用していることが分かる。そして、アンケート結果を見ると、右画の出方は個人差があるようだが、傍の三画と同じく始め縦画である傍二画については右画を持たずそのまま下ろしていることを踏まえると、右画を持つというのは縦画一般についての字体意識でも字形意識でもないようである。そして、半数以上が傍三画について右画を持っているということは、個々人の字形意識の問題ではなく、字体として傍第三画は右画を持っていると認識しているのである。

「沈」「既」「概」の三字についても、「就」字と同様傍に右画をもつ異体字が存在している。これらの三字については、『康熙字典』によって確認すると、それぞれの漢字には傍に右画を持つような異体字は存在せず、更に解字の観点から検討した場合、傍の「尢」「无」字はそれぞれ存在するが、問題の画に横画を持つ異体字は存在しない。従って、「就」字については篇旁を別に捉えたときに誤解の生じる余地は存在するが、「尢」「无」を傍に持つ「沈」「既」「概」については本来誤解の生じる余地は存在しないはずである。それでは、なぜ「沈」「既」「概」についても誤認識をするのかということについてであるが、アンケート結果における誤認識のパターンからその原因を推測することが出来る。

まずは「就」「沈」二字に於ける正体異体認識のパターンについて示すと左ようになる。但し、表中の数字は「就」「沈」の二字について共に正体又は異体を回答した人数のみを記し、何れかを誤字によって回答した人数は除くこととする。また、括弧内は組み合わせの数全体を全体としたときの割合を示す。その全体数は各表見出しの後の括弧内に記した。

【表三】 高校生の「就」「沈」正体・異体の組み合わせ (145)

		「就」正体	「就」異体
「沈」正体	72 50.7		
「沈」異体	0 0.0		61 42.1

【表四】 大学生の「就」「沈」正体・異体の組み合わせ (240)

		「就」正体	「就」異体
「沈」正体	99 41.3		
「沈」異体	8 3.3		116 48.3

右の表三では、「就」正体・「沈」正体の組み合わせが50.7%、「就」異体・「沈」異体の組み合わせが42.1%となっており、その何れかではほぼ全体数となる。表四においても同様に、「就」正体・「沈」正体の組み合わせが41.3%、「就」異体・「沈」異体の組み合わせが48.3%となっており、これもほぼ全体数となる。つまり、「就」字を正体とした場合は「沈」字についても正体とし、「就」字を異体とした場合は、「沈」についても異体とすることが窺える。

「就」「沈」二字の学習段階上の関係性については、「就」が小学校第六学年配当漢字であるのに対し、「沈」は中学校で学習する常用漢字である。従って、学習の順序としては「就」を学習した後に「沈」を学習することとなる。右表の正体異体の組み合わせで「就」「沈」ともに正体、或いは共に異体の組み合わせが多いのは、「就」で学習した字体が、

全く別字である「沈」にも字体上影響を及ぼしていることが窺えるのである。つまり、正しい字体認識が出来れば、後に学習する漢字についても結果的に正しい漢字字体が認識され、「就」で誤った字体が認識されてしまうと、後に学習する「沈」についても点画が似ているために誤認識がされるということである。そして、「就」を正体で認識した場合には、「沈」を異体で認識する割合が低いことが指摘できる。特に、表三では0.0%となっている。

但し、「就」で異体を学習したとしても、「沈」とは似ていないと認識されれば、調査結果では僅かながらでも「沈」を正体で学習することもある。これは、表三では8.3%、表四では7.1%確認できる。また、特にこの度のアンケート調査では高校生に顕著であるが、「就」を正体で学習した場合には、「沈」の字体を誤認識することがない。それは、大学生においても同様の傾向を示している。

「就」で誤認識をした場合、「沈」にも影響を及ぼすことを指摘したが、類似の画を持つ「既」「概」については傾向を異にするようである。それは、先の表一及び二の正体率の高さから窺える。「就」「沈」の誤認識の割合は高校生、大学生ともに近接しているのであるが、「既」「概」とは数字上差が認められる。これは、画数の少ない「尤」「尢」については同じように認識されるのに対して、画数の増える「无」については「尤」と異なったものとして認識されるのではないかと考えられる。但し、「尤」「无」二字の認識の有りようについては、なお詳細な調査と検討が必要なおところである。

しかし、「无」を誤認識するのは、「就」との組み合わせを見る限りその影響関係にあることが窺えるのである。まず、「就」と「既」との関係について表によって示す。

【表五】 高校生の「就」「既」正体・異体の組み合わせ (36)

		「就」正体	「就」異体
「既」正体	15 41.7		
「既」異体	0 0.0	12 33.3	9 25.0

【表六】 大学生の「就」「既」正体・異体の組み合わせ (147)

		「就」正体	「就」異体
「既」正体	65 44.2		
「既」異体	1 0.7	39 26.5	42 28.6

表五、表六からは、高校生大学生ともに正体同士の組み合わせ、異体同士の組み合わせの割合が高く同じ傾向を示すが、先の表三、四と比較すると「就」異体・「既」正体の割合が高いことが分かる。但し、「就」正体・「既」異体の割合については変化無く高校生0.0%、大学生0.7%と低いことが分かる。次に、「就」と「概」との関係について表によって示す。

表七、表八からは、表五、表六と同様高校生大学生ともに正体同士の組み合わせ、異体同士の組み合わせの割合が高く同じ傾向を示すが、先の表三、四と比較すると「就」異体・「概」正体の割合が高いことが分かる。また、「就」正体・「概」異体の割合については変化無く高校生0.0%、大学生0.4%と低いということまで同じく指摘できる。

【表七】 高校生の「就」「概」「正体・異体の組み合わせ（40）」

		「就」正体	「就」異体
「概」正体	20	50.0	
「概」異体	0	0.0	9 22.5
	11	27.5	

【表八】 大学生の「就」「概」「正体・異体の組み合わせ（242）」

		「就」正体	「就」異体
「概」正体	103	42.6	
「概」異体	1	0.4	84 34.7
	54	22.3	

つまり、表五から八まで共通して指摘できることは、「就」字を正体で認識している場合、「既」「概」両字の誤認識の割合が極めて少ないことである。つまり、初めに学習する漢字である「就」字の字体認識の有りようが、その後の常用漢字学習に極めて大きな影響を与えていることが指摘できるのである。

### 三、誤認識の生じる背景について

「就」字と、その他の「沈」「既」「概」三字についての誤認識の背景としては、先に指摘したように学習段階がそれぞれに異なるので、「沈」「既」「概」については「就」字の影響が背景にあると考えられる。そうすると、これまで問題としてきた事柄は、「就」字をなぜ誤認識した

漢字学習における字体認識のあり方とその影響とについて

のか、という点に集約される。その背景としては、次の二点を考えることが出来る。

- 一、学習段階で異体を指導された。
- 二、学習者自らが誤認識をした。

学習者が誤った情報を獲得する背景としては、指導的側面と学習的側面がある。まず一の指導的側面についてであるが、これは指導者自身がいつどの段階で誤認識をしたのかということであるので、結局の所指導者の学習段階での問題であるとする、誤認識の背景は二の学習的側面に収斂されると考えられるのである。

まず、「就」字について誤認識をした大学生の出身県を併せて調査を行ったところ、左に記すとおり広範囲に亘ることが明らかとなった。

埼玉・兵庫・島根・鳥取・広島・山口・徳島・愛媛・佐賀・長崎・大分・熊本・宮崎・沖縄

今回のアンケート調査の対象とした大学生については、出身県を同数にするということや、全国の出身者を対象とするなどの配慮を行っていないので、この度のアンケート調査で地域的な特性、つまり地域別の誤認識率などを具体的に検討することは出来ない。しかし、その範囲を考えると寧ろ地域的な特性は考え難く、広範囲で生じているようである。そこで、学習者が地域的な特性に関わらず漢字を学習する教材としての教科書について、検討をしたい。私たちが日常的に目にする書体は明朝体或いはゴシック体であるが、教科書には教科書体が採用されている。左にその三書体を掲げる。

ゴシック体

就

明朝体

就

教科書体

就

明朝体、ゴシック体については誤認の余地が少ないように見受けられるが、現在の教科書に採用されている教科書体については左払いの画と問題の縦画との間に、起筆デザインの影響で僅かながら隙間があるように見える。この部分が横画の存在を意識させ異体字を成立させているのではないか。

教科書体が教科書に採用されたのは、昭和一〇年発行『文部省国定教科書』からである。そして、学年別漢字配当表が学習指導要領に掲載されたのは、昭和三三年以降である。現代の教科書が教科書体を採用しているのは、その影響によって学習者が誤認識をする可能性があることは勿論であるが、そもそも指導者が誤認識をする可能性については教科書体の採用時期と学年別漢字配当表が示された時期を合わせ考えると、現役教員は教科書体によって「就」字を学習したはずである。

学習者、指導者の何れにしても、「就」字について誤認識が生じると、「沈」「既」「概」についても割合としては減少するものの、誤認識が生じている。その三字について、次に掲げる。

ゴシック体

沈

明朝体

沈

教科書体

沈

既

既

既

右の三字を見ると、「就」同様そのデザインからゴシック体、明朝体よりも教科書体の方が問題の画の間が広く空いているように見える。但し、「概」の木偏縦画の起筆にもデザイン上斜線が入っているように見えるが、今回のアンケート調査においてはこの縦画起筆に斜線を入れるような回答は見られなかった。問題の画に於いてのみ誤認識が認められるのは、「就」字の影響が考えられるのである。

教科書体は、墨溜をデザインとして示すことによって、字画の止め、撥ねを視覚的に捉えることが出来る。一方で、そのために字画の誤認識を生じる要因となっていることも考えられるのである。字画、字体を正確に認識させるためには、よりデザインを単純化し、字画の構成が明快な書体が求められようが、それによって新たな誤認識を生じる可能性が高くなるように思う。

#### 四、まとめ

ここまで、「就」字の字体認識の現状と、その字体認識に始まるその他の常用漢字の字体意識に与える影響とについて述べてきた。この度のアンケート調査を終了後、インフォーマントからは、異体を正体であると認識していた、という声が数多く聞かれた。このことは極めて当然で、

このようなアンケート調査において、正しくないと認識しながら漢字を書くことは無いからである。このような現象は、例えば方言学において「気付かない方言」と言われるものに似ている。自分としては普段から使用している表現を、当然一般的に使用されていると思ひこむ。しかし、他人の言語表現に接したときに初めて一般的でないと思ひこむのである。このことを漢字字体の認識についていえば、「気付かない異体漢字」といえる。

では何故「気付かない異体漢字」が生じてしまうのか、その背景はどのようなところにあるのか。初期の漢字学習の重要性については先に指摘したが、中学校、高等学校の漢字学習において修正がなされないということも原因の一つであると考ええる。先に掲げた調査結果から、大学生においても小学校で学習した「就」字の字体が修正されず半数以上が異体字を記している。勿論、小学生のころの誤認識の割合を知ることが出来ないで、大学生の割合と直ちに比較することは出来ないが、大学生の半数以上が誤認識をしている、という事実はやはり多いように感じるのである。従って、中学校、高等学校での漢字指導のあり方が、字体意識を修正する場としては非常に重要となってくる。

中学校、高等学校における漢字学習のあり方については以下のような事柄が考えられよう。まず、手書きをしないと間違いに気がつかないということがある。学習者が異体で普段書き記していようと、活字やパソコンの画面に表示された文字を見たときに、自分の書く字と異なるということに気付かずに済まされている、或いは自ら書く字体と同一であると認識の上で修正されている可能性がある。従って、学習者がどのように認識しているのかは、指導者にとっては書かれた文字からしか判断できないので、指導者は学習者が書いた文字に対して注意を払う必要がある。しかし、中学校、高等学校では漢字指導に十分な時間が取れないということも現実であろう。

漢字学習における字体認識のあり方とその影響とについて

従って、まず小学校において字画を曲げる、止める、撥ねるなどの一つ一つの形状について指導することは勿論であるが、字画全体の構成あるいは関係性を意識させるような指導が必要であると感ずるのである。

〔注〕

(1) 本稿では、「字形」を個々の字画の形状が異なるが字画の構成が同じものであるとし、また「字体」を漢字を構成する字画の概念であるとす。つまり、字画を真っ直ぐ下ろす字が正しいと分かっているが、デザイン上或いは個々人の好みによって字画を曲げている、という場合は字形の問題と考え、真っ直ぐ下ろすのは間違いで、右に一旦画を出すべきなのだと思ひこむ。認識しているのであれば、それは字体の問題であると考え、「字形」「字体」については、林大「字体・字形・書体をめぐって」(『日本語学』三巻三号、明治書院)による。

(2) 『康熙字典』は、『景印文淵閣 四庫全書』(第二二九〇二三一冊、臺灣商務書印館)所収本、及び『康熙字典』(中華書局出版、二〇一〇年一月)によった。

(3) フォントの都合で判別し難いが、『康熙字典』によって確認すると、二画目に横画の存在していることが確認できる。横画の存する「尢」字と、存しない「尢」字は、『康熙字典』の「二字相似」字として掲出されていることから、別字であることが確認できる。

(4) この指摘は『康熙字典』の記述によれば「という範囲に留まることはいうまでもない。『康熙字典』においては、池田証寿「メディアの違いと漢字使用・字体意識の関係」(『人文学と情報処理』二二六、勉誠社、二〇〇〇年四月)に指摘があるように、字体について不統一の部分が確認されている。常用漢字表にない漢字としては、例えば左の漢字が考えられる。

耽 厩 概 无 无

(5) この度の調査においては、字体意識を問うために既習の漢字を調査対象漢字とした。

(6) 大学生は広島市内の大学一・二年生、高校生は広島市内の高等学校一年生を対象とした。大学生へのアンケート調査は、平成二三年七月四・八日の両日、高校生へのアンケート調査は、七月四・七日に実施した。

(7) 「正体」「異体」は、本来字体として成立しているものについて、そのように称するものと考えるが、本稿では臨時的に使用した。

(8)

異体の「就」字を書いた大学生の中には、旁三画を右へ出すように指導されたと説明するものもいた。そのように指導を受けた、ということが事実であれば、学生のみならずその時の指導者も字体として認識していたということになろう。

し上げる。

(9)

「就」字は、現行の教科書各社（東京書籍、光村図書、学校図書、教育出版、日本書籍）を確認したところ、第六学年の上下二冊ある内、何れも下に掲載されている。「沈」「概」「既」は、常用漢字であるので中学校で学習する漢字であるが、参考までに中学校国語科教科書『伝えあう言葉』（教育出版、二〇〇五年一月）をみると、それぞれ「沈」第2学年、「既」第1学年、「概」第2学年となっている。

(10)

同一地域の人数については今回の検討対象としない。どの地域に多く見られる現象であるのか、ということを示そうとするのではなく、広い範囲で認められる現象である、と指摘する留めたい。また、地域に中四国、九州という偏りが見られるのは、広島市内の大学生を対象としたため、関西以東の出身者が極めて少ないことに起因している。

(11)

書体は、それぞれMSゴシック体、MS明朝体、HG教科書体によって表示している。

(12)

板倉雅宣『教科書体変遷史』（朗文堂、二〇〇三年三月）に詳しい。

(13)

本稿では様々に考え得る要因の一つという程度に留めたい。このことを積極的に説明するためには、教科書に教科書体が採用させる以前と以後とで誤認識の割合に変化がある、ということを示明しなければならぬが、本稿ではそこまでの調査が及んでいない。なお、書体が字体に与える影響については、杉本つとむ「異体字はなぜうまれるか」（『日本語学』三卷三号、明治書院）に「楷書体が行・草書体となるなど運筆を一つのプロセスとして、再び楷書体にもどることで字体の異形をつくる」という指摘がある。中学校、高等学校の教育現場において、どのような漢字指導が行われているのかということについては、それぞれの教育段階でまずは異なるであろうし、現状を把握していないので断定的なことはいえない。しかし、小学校における漢字指導と同様字画一つ一つについて指導を行っているか、部首や漢字の構成要素についてはどうか、という点と甚だ疑問である。

〔付記〕

高校生へのアンケート調査については、広島文教女子大学附属高等学校国語科教諭石川雅意・森由香里両氏の協力を賜った。記して感謝を申

平成二十三年十一月二日 受理